

# 慈眼山遺跡 8次

2012年

日田市教育委員会



第 1 面出土遺物集合写真



## 序 文

この報告書は、当委員会が平成22年度に桂林公民館建設事業に伴って発掘調査を行った慈眼山遺跡8次調査の内容をまとめたものです。調査では、15世紀～16世紀にかけての掘立柱建物跡や祭祀に使用されたと考えられる土坑やピット、溝などが発見され、これまで本遺跡で行われてきた調査成果と合わせて、大友姓日田氏が支配する時代の様子を窺うことができる成果を得ることができました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や桂林地区の歴史解明、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、日田市立桂林小学校をはじめ、調査に当たって協力いただきました方々に心から厚くお礼を申し上げます。

平成24年3月

日田市教育委員会  
教育長 合原 多賀雄

## 例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成22年度に実施した慈眼山遺跡8次の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成22年度に地区公民館建設事業（主管課：日田市教育庁生涯学習課）に伴って、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。
3. 調査にあたっては、日田市立桂林小学校、日田市教育庁生涯学習課・教育総務課のご協力を賜った。
4. 発掘調査は若杉が担当した。
5. 基準点測量、全体図作成、遺構実測・製図、空中写真撮影については、調査補助業務として、株式会社理蔵文化財サポートシステム大分支店に委託して実施し、その成果品を使用した。
6. 遺構写真撮影は、若杉が行った。
7. 調査において確認された柱木の樹種同定に関して、佐々木由香氏（株式会社パレオ・ラボ）より原稿を執筆いただいた。
8. 石器石材については、一部を野田雅之先生（大分県地質学会会長）に肉眼観察により同定していただいた。
9. 遺物実測については、一部を若杉が行い、その他の遺物実測及び製図を有限会社九州文化財リサーチに委託し、その成果品を使用した。
10. 遺物写真の撮影は株式会社写真測エンジニアリング大分支店に委託し、その成果品を使用した。
11. 報告書作成にあたっては、川津真由美（文化財保護課臨時職員）の協力を得た。
12. 挿図中の方角、文中の方角は真北を示す。
13. 写真図版の遺物に付した番号は、実測図番号に対応する。
14. 出土遺物および図面、写真類は、日田市理蔵文化財センターにて保管している。
15. 本書の執筆はIV以外を若杉が行い、全体の編集は若杉が行った。



日田市の位置

# 本文目次

I 調査の経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘作業の経過	2
(3) 整理等作業の経過	2
II 遺跡の立地と環境	3
III 調査の成果	4
(1) 調査の方法と概要	4
(2) 遺構と遺物	5
IV 慈眼山遺跡出土木材の樹種同定	19
V 総括	21

## 挿 図 目 次

第1図 調査区位置図 (1/5,000)	2	第10図 第1面ビット実測図 (1/20)	12
第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)	3	第11図 第1面ビット出土遺物実測図(1) (1/3)	13
第3図 調査地周辺地形測量図 (1/1,000)	4	第12図 第1面ビット (A2 P6) 出土遺物実測図(2) (1/3)	14
第4図 調査区東・西壁土層実測図 (1/50)	5	第13図 第1面ビット出土遺物実測図(3) (1/3)	14
第5図 第1面遺構配置図 (1/100)	6	第14図 第2面遺構配置図 (1/100)	15
第6図 第1面溝状遺構実測図 (1/80・1/40)	7	第15図 第2面遺構実測図及び出土遺物実測図 (1/30・1/40・1/60・1/80, 1/3)	17
第7図 第1面溝状遺構出土遺物実測図 (1/3・1/2)	8	第16図 第2面ビット出土遺物実測図 (1/3)	18
第8図 第1面土坑実測図 (1/30)	10	第17図 その他の出土遺物実測図 (1/3・1/2)	18
第9図 第1面土坑出土遺物実測図 (1/3)	11		

## 本文写真目次

写真1 現場見学風景	1
写真2 発掘作業風景	1
写真3 発掘体験風景	2
写真4 調査区西壁土層	5
写真5 慈眼山遺跡出土柱材の光学顕微鏡写真	20

## 表 目 次

第1表 出土土器観察表(1)	22
第2表 出土土器観察表(2)	23
第3表 出土土器観察表(3)	24

## 写真図版目次

巻頭写真図版	第1面 (上層) 出土遺物集合写真	中右 A2-P23 発掘状況
写真図版1	上 調査区全景 (北西から)	下左 A2-P26 発掘状況
	下 調査区全景 (西から)	下右 B2-P11 発掘状況
写真図版2	上 調査区東壁土層堆積状況	上左 B2-P11 (柱木) 発掘状況
	下 第1面全景 (北東から)	上右 B2-P12 発掘状況
写真図版3	上 1号溝状遺構発掘状況 (北西から)	中左 B2-P18 発掘状況
	中左 1号溝状遺構遺物出土状況	中右 B2-P19 発掘状況
	中右 2・3号溝状遺構発掘状況 (西から)	下左 B2-P28 発掘状況
	下 3号溝状遺構土層堆積状況	下右 B2-P41 発掘状況
写真図版4	上左 4号溝状遺構発掘状況 (東から)	写真図版9
	上右 5号溝状遺構発掘状況 (西から)	上左 B3-P1 発掘状況
	中 4号溝状遺構遺物出土状況	上右 B3-P32 発掘状況
	下 4号溝状遺構土層堆積状況	下 第2面全景 (北東から)
写真図版5	上 2号土坑発掘状況 (西から)	写真図版10
	中 3号土坑発掘状況 (北から)	上左 掘立柱建物跡発掘状況 (西から)
	下 5号土坑発掘状況 (北西から)	上右 6号溝状遺構発掘状況 (北西から)
写真図版6	上左 4号土坑発掘状況 (北東から)	下左 6号溝状遺構遺物出土状況
	上右 6号土坑発掘状況① (北東から)	下右 6号溝状遺構土層堆積状況
	下左 6号土坑発掘状況② (北東から)	写真図版11
	下右 6号土坑発掘状況③ (北東から)	上左 7号土坑発掘状況 (西から)
写真図版7	上左 A1-P2 発掘状況	上右 8号土坑発掘状況 (北東から)
	上右 A2-P6 発掘状況	中 7号土坑土層堆積状況
	中左 A2-P4 発掘状況	下左 B2-P61 発掘状況
		下右 B2-P73 発掘状況
		写真図版12~18 出土遺物

## I 調査の経過

### (1) 調査に至る経緯

本調査の原因となった桂林公民館の建設は地区公民館建設事業として計画された事業である（主管課：市教育庁生涯学習課）。平成21年10月に文化財保護課が平成22年度実施予定の事業について各課に照会を行った中で、その計画について回答が示された。日田市立桂林小学校校庭南側の一角とした事業予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地（慈眼山遺跡）に該当し、それまで7次に亘る調査の中で、多くの遺構・遺物が確認されていることから、今回の対象地も遺構が確認される可能性が高いと判断した。その後、数回にわたって文化財保護課、生涯学習課で事業スケジュールの調整の結果、平成22年度当初に予備調査を行い、発掘調査が必要になった場合は、10月着工予定の本体工事開始前の9月末までに調査を終了することとした。また、整理等作業・報告書作成について、事業年度の関係から、平成23年度の報告書刊行を行う必要があったことから、整理等作業を平成22年度から着手し、平成23年度は残りの整理等作業と報告書作成、刊行を行うこととした。

以上の経過を経て、平成22年4月28日に予備調査を実施し、その結果、現地表面から40～60cm及び60～75cm下で2面の整地層とこれに掘り込まれた土坑、ピットと土師質土器が確認された。これと同時に遺構面が東から西へ傾斜し、さらに西側には遺構が確認できなかつた。こうした予備調査の結果を基に、発掘調査範囲については、建物基礎が遺構面を損なう恐れのある東側半分を対象とすることにした。また、調査期間については、児童の安全確保の観点から夏休み初日の7月21日から着手し、9月10日までの予定で実施することにした。

なお、発掘作業と整理等作業の体制は以下のとおりである。（職名は当時のまま）

#### 平成22年度

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括	財津隆之（日田市教育庁文化財保護課長）
調査事務	土居和幸（日田市教育庁文化財保護課埋蔵文化財係長） 中嶋美徳（同副主幹） 塚原美保 若杉竜太（以上、同主査）
調査担当	若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主任）
調査員	今田秀樹 行時桂子（以上、日田市教育庁文化財保護課主査） 渡邊隆行（同主任） 矢羽田幸宏（同主事）
発掘作業員	河津定雄 五反田静子 後藤美知夫 高村三郎 筒井英治 平原知義 用松理恵 山川理江
整理作業員	伊藤一美 鍛冶谷節子 武石和美

#### 平成23年度

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）
調査統括	財津隆之（日田市教育庁文化財保護課長）
調査事務	土居和幸（日田市教育庁文化財保護課埋蔵文化財係長） 華藤善紹 井上和泉 若杉竜太（以上、同主査）



写真1 現場見学風景（桂林小）



写真2 発掘作業風景

報告書担当 若杉竜太（日田市教育庁文化財保護課主査）

調査員 行時桂子 渡邊隆行（以上、日田市教育庁文化財保護課主査） 上原翔平（同主事）

整理作業員 伊藤一美 安元百合

## (2) 発掘作業の経過

発掘作業は平成22年7月21日に着手した。以下、その経過を記す。

7月21日 重機搬入、表土剥ぎ開始、基準点測量実施

7月22日 第1面、遺構検出開始

7月26日 遺構掘り下げ開始

7月30日 遺構実測開始

8月5日 大韓民国国立昌原考古学研究所・牛嶋茂氏来訪

8月9日 桂林公民館ふるさと探検隊、小学生現場見学

大分県教育庁埋蔵文化財センター・後藤主幹、田中主幹来訪

8月17日 第1面、調査終了

8月18日 第2面、遺構検出開始

8月19日 春日市・井上義也氏来訪

遺構掘り下げ、実測開始

8月26日 桂林公民館ふるさと探検隊、小学生

現場見学

8月31日 空中写真撮影実施

9月3日 遺構掘り下げ、実測終了

9月6日 桂林小学校6年生見学

器材撤収

9月7日 調査区埋め戻し開始

9月10日 埋め戻し完了、調査終了



写真3 発掘体験風景（桂林公民館）

## (3) 整理等作業の経過

整理等作業は、調査年度の平成22年度中に着手し、平成23年度まで実施した。平成22年度の作業は水洗を行った後、遺物に付着した鉄分の除去作業を行い、器面の剥落等で脆くなっている遺物についてはバインダー処理を施した。平成23年度は注記、接合作業の後、必要に応じて石膏による補強・復元作業を実施し、遺物実測・製図及び写真撮影について委託業務を行った。

また、報告書作成にあたり、坂本嘉弘氏（大分県教育庁埋蔵文化財センター）にも有益なご教示・ご指導を頂き、お世話になった。



第1図 調査区位置図（1/5,000）

## II 遺跡の立地と環境

慈眼山遺跡は盆地東部の、北側に慈眼山、東側に佐寺原台地を望む、沖積地上に位置する。この一帯は官公庁や学校などが集中する地域であり、宅地造成を中心にこれまでに7次にわたる調査が行われてきた。

遺跡の北東側に位置する1～3次調査では、古代・中世の遺構が検出されている。古代においては、建物は確認されていないものの、井桁組の井戸が発見されたことから、周辺に居住地の存在が想定されると同時に、「林」「門」の墨書土器の存在から公的施設や有力者がいたことが推測され、古代日田の有力氏族である日下部氏との関係性が指摘されている。中世の遺構については、遺跡の南側を中心に実施された4～7次調査の結果を合わせて、14世紀から16世紀の遺構や遺物が確認されている。これらの遺構は、大規模な土地造成を窺わせる整地層に掘り込まれており、大藏姓日田氏から大友姓日田氏が支配した時期の城下町の様子を窺うことができる。さらに遺跡の北側から東側にかけては、日田氏の居城であった大蔵古城が広がる。

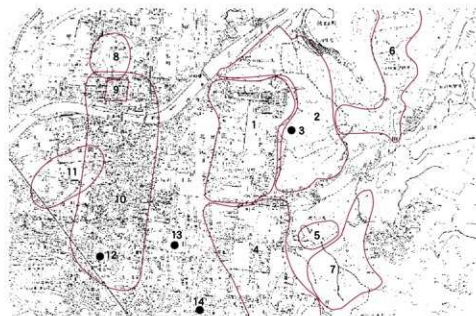
次に慈眼山遺跡周辺の遺跡を見てみると、南側の大波羅丘陵の東側の沖積地に大波羅遺跡がある。この遺跡では5次にわたる調査が行われ、大型の柱木を用いた柱穴列や「山」「田」などの墨書土器が見つかっており、古代、特に奈良時代の官衙的施設が存在が想定されている。また、大波羅遺跡の北東側には、大友姓日田氏滅亡後、日田を治めた八部老の一人、堤氏の居城であった堤城跡がある。

そのほか、遺跡東側には丘陵中腹には古墳時代中期の円墳と考えられている丸山古墳、また台地上には弥生時代中期～終末期にかけての集落が確認された佐寺原遺跡がある。特に終末期の竪穴建物跡から炭化したアズキやイネ・アワ・キビなどが出土し、当時の食生活や周辺環境を知る上で貴重な成果が上がっている。また大波羅遺跡の東側の丘陵上には弥生から古墳時代にかけての溝や流路などが確認された赤迫遺跡がある。

次に遺跡の西側に目を移すと、豆田町を中心とした城下町遺跡が広がり、花月川を挟んだ北側には江戸時代に代官・郡代が置かれた永山布政所跡、その背後の独立丘陵には永山城跡・月隈横穴墓群が存在する。一方、城下町遺跡の西側では、古墳時代中期の鉄鍬が出土した一丁田遺跡、南側には江戸時代の私塾跡である史跡威宜園跡、古代の遺構が確認された日田条里四反畑地区や弥生時代・古墳時代の竪穴建物跡や溝が発見された日田条里飛矢地区など存在する。こうした状況を見ると慈眼山遺跡及びその周辺は古代以降、中近世を通して日田における中心地域の一つであったといえる。

〔文 献〕

坂本嘉弘『慈眼山遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第55集 大分県教育委員会 2011



- 1 慈眼山遺跡
- 2 大蔵古城跡
- 3 丸山古墳
- 4 大波羅遺跡
- 5 堤城跡
- 6 佐寺原遺跡
- 7 赤迫遺跡
- 8 永山城跡・月隈横穴群
- 9 永山布政所跡
- 10 城下町遺跡
- 11 一丁田遺跡
- 12 史跡威宜園跡
- 13 日田条里四反畑地区
- 14 日田条里飛矢地区

第2図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)



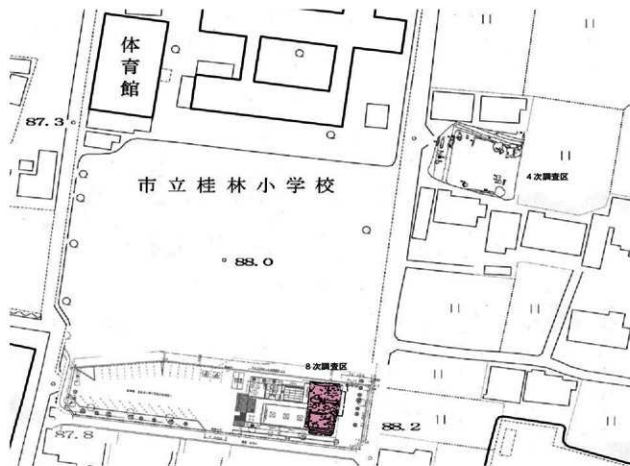
### III 調査の成果

#### (1) 調査の方法と概要 (第3図)

今回の調査では、機械による運動場表面の真砂土などの除去後、遺構検出を行った。土層の堆積状況については次のとおりである(東壁)。現地表面の運動場真砂土(1層)、旧水田基盤土(2層)、旧水田の造成面(下層)の下位に遺構面(8層)が確認された。この遺構面は暗灰橙色を呈する粘質土で鉄分やガラスを含む灰色の砂を含み、これを掘り込むピットなどが確認された(7層)。この遺構面の20~30cm下位には、灰橙色を呈する粘質土が堆積し(10層)、この層に掘り込まれる遺構が確認された(9層)。この堆積状況と予備調査の結果を合わせ、8層と10層は人為的に造成された整地層と判断し、上層の遺構が見られる8層上面を第1面、下層の遺構がある10層上面を第2面とした。なお、下層の11層、12層は自然堆積層と考えられ、遺物等は含まれていなかった。

遺構の検出状況については、その密度は周辺地における過去の調査例から想定していた状況より低かったものの、第1面、第2面ともに調査区全体にわたって、万遍なく見られた。また、遺構面は東から西に向かって緩やかに傾斜しており、標高は第1面が86.9~87.3m、第2面が86.7~87.0mであった。遺構は2面合わせて、掘立柱建物1棟、土坑7基、溝状遺構6条、ピットが多数検出された。その他、柱木が残っており、柱穴と判断できるピットもあったが、掘立柱建物と判断できるような展開を確認できなかったものの、数棟の建物があった可能性がある。さらに上層・下層ともに部分的にトレンチを設定して掘り下げを実施し、整地層に含まれる遺物の確認を行った。遺構及び整地層が出土した遺物は土師質土器を中心にコンテナケース9箱分が出土した。

また、調査区内を10m×8mのグリッドに分け、東から西へA・B、北から南へ1~3とし、遺物の取り上げやピット番号を付すのに利用している。なお、土坑のうち、1号土坑については、調査中に攪乱と判断したこ



第3図 調査地周辺地形測量図 (1/1,000)

とから欠番とし、出土した遺物については、グリッド一括とした。この他、遺物については特徴的なもののみを記述している。

## (2) 遺構と遺物

### 1. 第1面 (第5図 図版2)

#### 溝状遺構 (第6・7図 図版3・12・13)

##### 1号溝状遺構

この溝状遺構は調査区南西側で確認され、数基のピットと切り合い関係をもつ。この遺構は東西及び南北方向に流れ、「T」字形を呈するとみられるが、北側は削平を受けている。確認された長さは東西方向約2.5m、南北方向約3.0mで、幅は最大で約0.3mを測る。断面形は舟底状を呈する。深さは5～10cmで、南から北、及び東から西へ傾斜している。

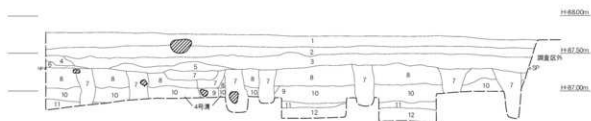
遺物は土師質土器環・小皿などが出土した。

##### 出土遺物

第7図3は小皿である。ススが付着しており、灯明皿として利用されたと考えられる。また、口縁の一部を打ち欠いている。

##### 2号溝状遺構

この溝状遺構が調査区の南側で確認され、東西方向に流れる。確認された長さは約4.4m、幅は最大で約0.5m



#### 調査区東壁土層

- 1層 西壁1層と同じ 高砂土
- 2層 西壁2層と同じ 部分的に基盤土(西壁3層)が見られるが、西壁ほど明確でない。
- 3層 西壁7層と同じ 東側からの土砂の流れ込みか水田を作る際の造成面。
- 4層 暗茶色粘質土層 ち密
- 5層 灰茶褐色粘質土層 ち密
- 6層 灰白色砂質土層
- 7層 灰褐色系粘質土層 第1面遺構埋土
- 8層 西壁8層と同じ 塾地層① 中位村近にガラスを含む灰色の砂がブロックを含む。
- 9層 灰褐色系粘質土層 第2面遺構埋土
- 10層 西壁9層と同じ 塾地層②
- 11層 西壁10層と同じ
- 12層 西壁11層と同じ

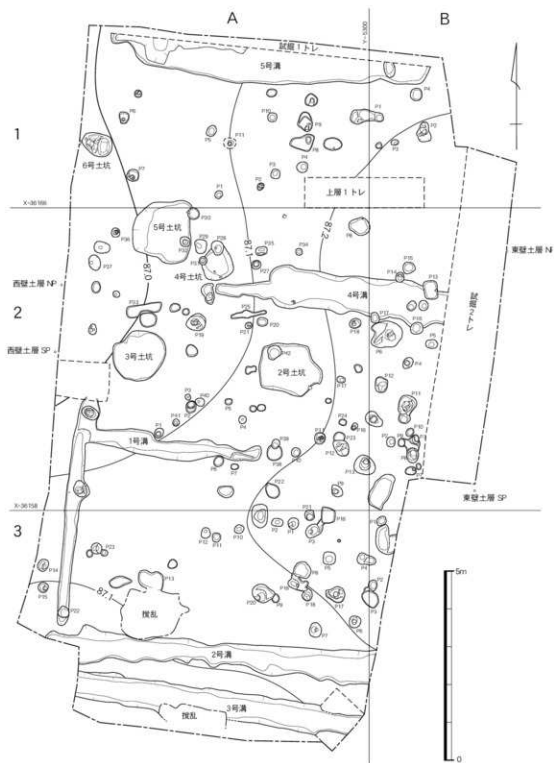
#### 調査区西壁土層

- 1層 高砂土 運動場
- 2層 暗灰色粘質土層 水田層
- 3層 暗茶色粘質土層 水田基盤土
- 4層 暗灰色粘質土層
- 5層 暗灰色粘質土層 後部の掘り込み
- 6層 灰白色粘質土層
- 7層 灰褐色粘質土層
- 8層 暗灰色粘質土層 塾地層① 鉄分少
- 9層 暗褐色粘質土層 塾地層② 鉄分多
- 10層 暗褐色粘質土層
- 11層 暗褐色粘質土層 自然堆積層として捉えられる。
- 12層 灰褐色砂質土層 日は粗い

第4図 調査区東・西壁土層実測図 (1/50)



写真4 調査区西壁土層 (左:検出面より上層・右:深掘り部分)



第5図 第1面遺構配置図 (1/100)

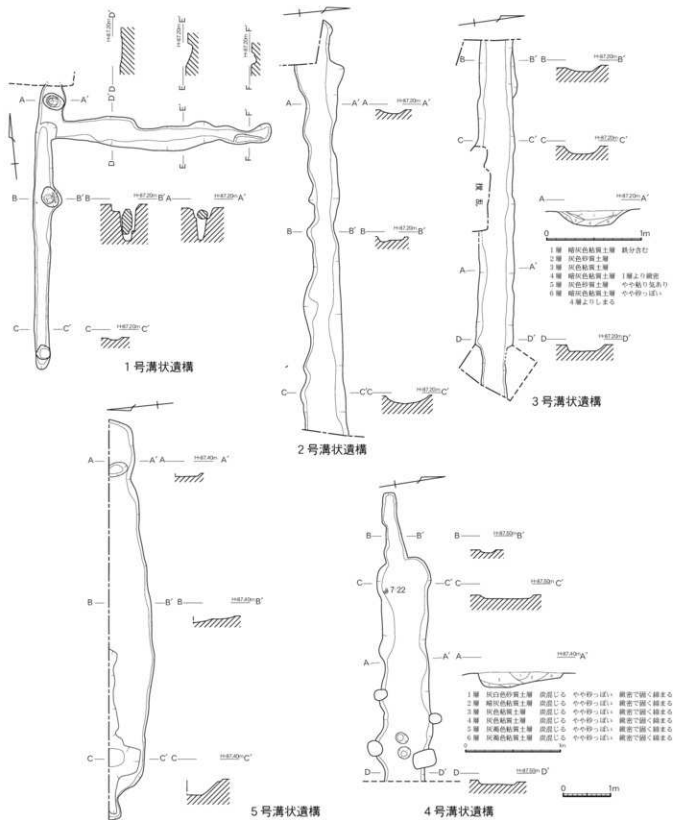
を測る。断面形は舟底状を呈する。検出面からの深さは5～20cmを測り、東から西へ傾斜している。  
遺物は土師器質土器環・小皿などが出土した。

#### 出土遺物

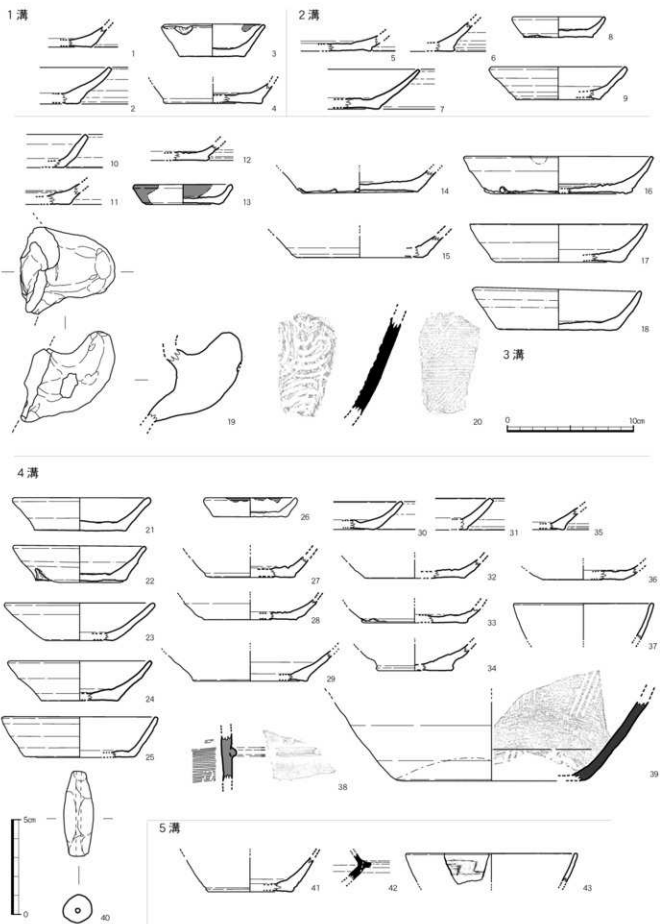
第7図5は環である。外面には黒斑、内面にはわずかにススが附着する。

#### 3号溝状遺構

この溝状遺構は2号溝状遺構の南側で確認され、これとほぼ平行して流れる。確認された長さは約3.7m、幅



第6図 第1面溝状遺構実測図 (1/80・土層1/40)



第7図 第1面溝状遺構出土物実測図 (1/3・40のみ1/2)

は最大で約0.4mを測る。断面形は舟底状、もしくは逆台形状を呈する。検出面からの深さは13～20cmを測り、東から西へ傾斜している。

遺物は、土師質土器環・小皿などが出土した。

#### 出土遺物

第7図13は小皿で、内・外面とも黒斑が見られる。14は環である。被熱により赤化し、ススが付着する。19は土師器の把手、20は須恵器の裏であるが、いずれも整地層中に含まれていたものが、混入したものであろう。

#### 4号溝状遺構

この溝状遺構は調査区のほぼ中央で確認され、数基のピットと切り合い関係をもつ。確認された長さは約3.0m、幅は東側0.8mが約0.15～0.2m、西側2.2mが約0.5～0.6mとなっている。断面形は逆台形状を呈する。検出面からの深さは10～15cmを測り、東から西へ傾斜している。

遺物は土師質土器環・小皿や瓦質土器の挿鉢・火鉢など多くが出土している。これらのうち、土師質土器の環・小皿については、整理作業の段階で接合・復元ができ、図化できたものが16点あった。その他、接合できなかった分の確認を行った結果、色調や磨耗具合から約40個体分であると判断できた。時期差も見られないことから、短期間での廃棄行為が行われたと考えられる。

#### 出土遺物

第7図21～25、27～36は土師質土器環、26は同小皿である。21は内外面ともにススが付着し、被熱により黒化している。24は外面全体にわたって、まばらにススが付着する。32は内面が被熱により、赤化する。26はススが付着する。38は瓦質土器の火鉢と思われる。断面台形の突帯を貼り付ける。39は瓦質土器の挿鉢である。器面には被熱による細かい凹凸が見られる。

40は土罐で、一部黒変が見られる。一部指押え、ナデで成形し、色調は淡橙灰色を呈し、斜長石・角閃石・黒色粒子を含む。長さ4.5cm、最大幅1.6cm、孔径0.3cm。

#### 5号溝状遺構

この溝状遺構は調査区の北側で確認された。北側は調査区外へ広がるが、予備調査時に一部を掘り過ぎた可能性がある。確認された長さは約4.2m、幅は最大で約0.5m+ $\alpha$ を測る。断面形は逆台形状を呈する。検出面からの深さは2～10cmで、東から西へ傾斜している。

遺物は土師質土器環や須恵器などが出土している。

#### 出土遺物

42は須恵器環身である。整地層中に含まれていたものが、混入したものと考えられる。

### 土坑（第8・9図 図版5・6・13・14）

#### 2号土坑

この土坑は調査区のほぼ中央で確認された。平面形は不定形で、底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。規模は長軸約1.7m、短軸約1.3m、検出面からの深さは約5cmである。

遺物は土師質土器環などが出土した。

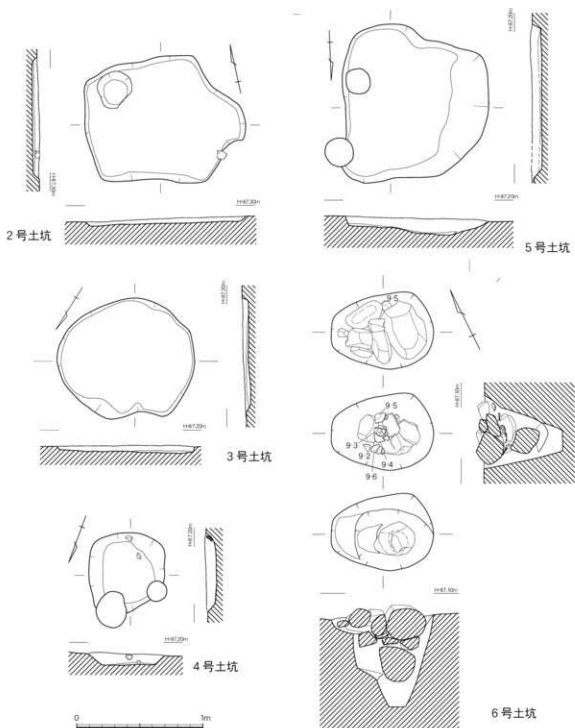
#### 出土遺物

第9図1は土師質土器環である。内面の一部にススが付着する。全体の1/3程度残存しているが、破損後被熱したと思われる。

#### 3号土坑

この土坑は調査区のほぼ中央西側で確認された。平面形はやや歪な円形で、底面は南西側がやや低くなる。壁は直立気味に立ち上がる。規模は長軸約1.5m、短軸約1.2m、検出面からの深さは約5cmである。

遺物は土師質土器環などが出土したが、図化可能なものはなかった。



第8図 第1面土坑実測図 (1/30)

#### 4号土坑

この土坑は調査区の中央よりやや北寄りで確認され、2基のピットに切られる。平面形は不定形で、底面はやや舟底状を呈し、壁は斜めに立ち上がる。規模は長軸・短軸とも約0.8m、検出面からの深さは約10cmである。遺物は土師質土器環などが出土したが、図化可能なものはなかった。

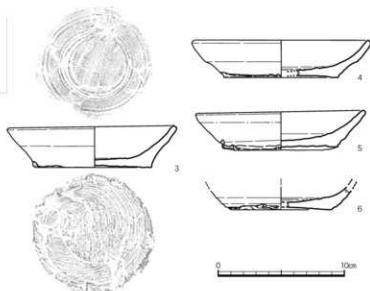
#### 5号土坑

この土坑は4号土坑の北西側で確認され、2基のピットに切られる。平面形は不定形で、底面は西側に向かっ

## 2号土坑



## 6号土坑



第9図 第1面土坑出土遺物実測図(1/3)

て傾斜する。西側が緩やかであるのに対して、それ以外は比較的に傾斜を持って立ち上がる。規模は長軸約1.6m、短軸約1.5m、検出面からの深さは約10cmである。

遺物は土師質土器環などが出土したが、図化可能なものはなかった。

### 6号土坑

この土坑は調査区の北西隅で確認され、数段にわたり掘り込まれていた。平面形は楕円形を呈する。この土坑内には川原石が数段にわたって充填され、これらの石に挟まれるように土師質土器環、青磁皿などが出土した。これらの遺物は石の重さにより割れていたものの、正位に置かれた坯もあり、人為的に置かれたと判断でき、祭祀行為に関わる遺構と考えられる。

なお、底面はほぼ平坦である。規模は長軸約0.8m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約70cmである。

遺物は土師質土器環や青磁皿などが出土した。

### 出土遺物

第9図2は龍泉窯系の青磁皿である。内面には柳描文がみられる。3は土師質土器環である。出土時は2点であったが、整理中に接合したため、故意に割られた可能性もある。器面は被熱により黒化し、底部には板状圧痕がみられる。

### ピット(第10図 図版7・8)

今回の調査では多くのピットが確認されたが、ここでは遺物の出土状況に特徴が見られるものを中心にくつかりについて図化を行った。なお、A2-P6については、調査中の判断ミスで図化を行っていないものの、多くの遺物が出土したことから他のピットと同様に祭祀的な性格のものと考えられる。

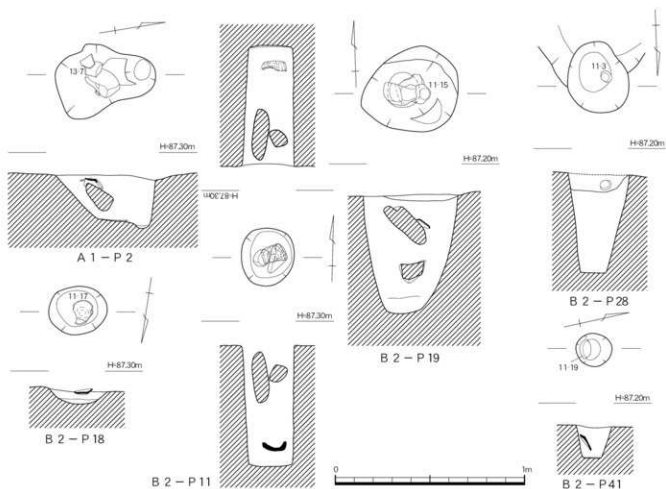
#### A1-P2

このピットはA1グリッドの中央付近で確認された。平面形は不定形であるが、北側の壁がほぼ直立することから本来の掘り方が残っていると考えられる。南側の壁は傾斜しており、柱抜き取り時の痕跡と考えられる。この傾斜部分において、川原石と土師器質土器環や播鉢が据え置かれた状態で出土した。規模は長軸約53cm、短軸約40cm、検出面から床面までの深さは約25cmを測る。

#### B2-P11

このピットはB2グリッドの南東隅で確認された。平面形は円形を呈し、径は約30cmを測る。壁はほぼ垂直





第10図 第1面ピット実測図 (1/20)

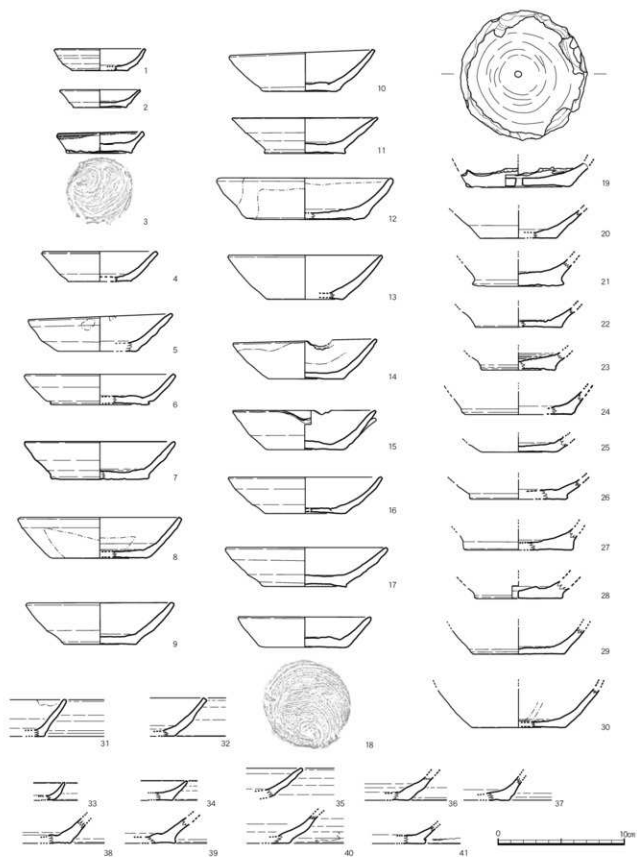
に立ち上がり、検出面から床面までの深さは約65cmを測る。このピットの上位付近では2点の川原石が検出され、また底面から約10cm浮いた状態で木材が検出された。この木材は加工痕も見られたことから、柱木になると考えられる。このような状況から、柱を抜き取ったあとに川原石を埋めたものと考えられ、他のピット同様に廃絶行為に関係するものと考えられる。なお、A1-P2にみられたような壁の傾斜など、柱抜き取り時の痕跡は確認できなかった。

#### B2-P18

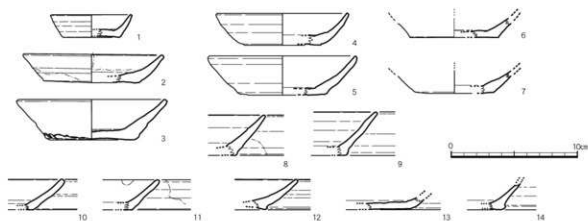
このピットはB2グリッドの東端、4号溝状遺構の南側で確認された。平面形は円形を呈し、長軸約31cm、短軸約26cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、検出面から床面までの深さは約7～8cmである。遺物は床面より約5cm上で出土した。なお、このピットは壁の立ち上がりや深さから柱穴になるとは考えにくく、埋納を行うために掘られたものと考えられる。

#### B2-P19

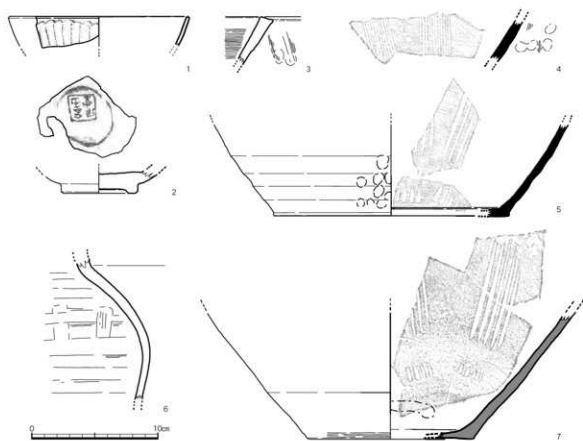
このピットはB2グリッドほぼ中央で確認された。平面形は歪な円形を呈し、規模は東西軸約50cm、南北軸約45cmを測る。壁はややカーブを描くように立ち上がり、床面も平坦ではない。検出面から床面までの深さは約62cmを測る。北側の掘り方がやや崩れていることや南東側に段が見られることから、柱の抜き取り痕の可能性もある。床面より約20cmと45cmの位置で礫が出土し、上位の礫に置かれたような状態で土師質土器片が出土した。



第11図 第1面ビット出土遺物実測図(1) (1/3)



第12図 第1面ビット (A2-P6) 出土遺物実測図(2) (1/3)



第13図 第1面ビット出土遺物実測図(3) (1/3)

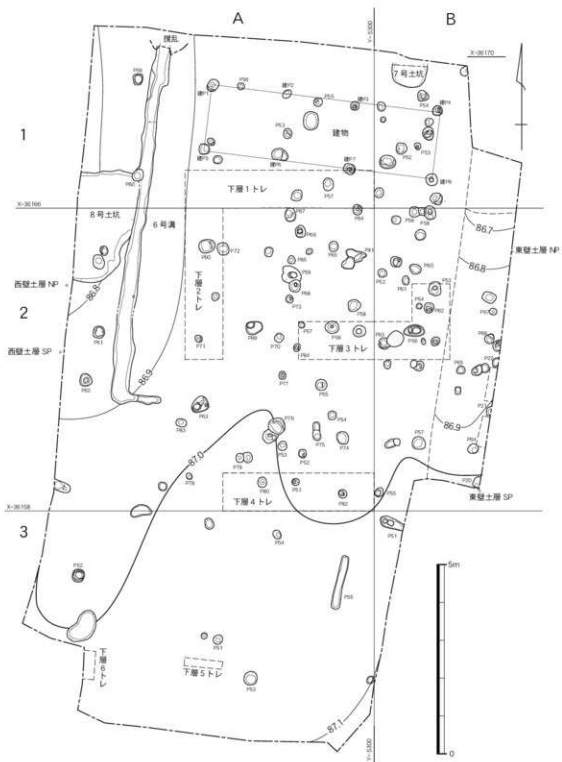
#### B2-P28

このビットはB2グリッドのほぼ中央で確認され、4号土坑に切られる。平面形は歪な円形を呈し、規模は南北軸約38cm、東西軸約33cmを測る。壁は急角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは約53cmを測る。床面から約45cm上位で土師質土器片が出土したが、ほかのビットとは異なり人為的に置かれたものとは考えにくく、流れ込みの可能性がある。

#### B2-P41

このビットはB2グリッドの南端、1号溝状遺構の北側で確認された。平面は円形を呈し、径は約20cmを測る。

壁は急角度で立ち上がり、検出面から床面までの深さは約18cmである。このピットの南側において、床面より約10cm上位において、口縁を打ち欠き、底面に穿孔を施した土師質土器が内面を壁側に向け、ほぼ直立状態で1点出土した(第11図19)。この状況から、明らかに人為的に埋められたものと考えられる。また、柱木の痕跡など、柱穴と判断できるものはなかった。



第14図 第2面遺構配置図 (1/100)

## 出土遺物 (第11・12図 図版14~16)

第11図はいずれもピット出土の土師質土器で1~3、33・34が小皿、それ以外は坏である。出土遺構については観察表を参照されたい。

3は口縁部の内外面ともに全体の1/2程度にススが付着する。14・15はともに口縁部の1ヶ所を打ち欠くが、14はやや歪んだ打ち欠きで、器面にはスが多く付着する。16は内底面に粘土を充填した痕跡が見られる。19は口縁部を全周にわたり打ち欠き、底面のほぼ中央に1ヶ所の穿孔を施す。25は破損後に被熱による黒斑がみられる。28は底面に穿孔が見られ、焼成前に施されたものと考えられる。29は内面・外面ともにまばらに、30は内面にススが付着する。33は内面にまばらにスが見られる。36は外面ほぼ全体にわたって、黒斑が見られ、39は底面にススが付着する。

第12図はすべてA2-P6出土の土師質土器で、1が小皿、2~14が坏である。2は4号溝状遺構から出土したものと接合した。内面はススが付着し、外面には黒斑が見られる。3は破損後被熱したのか、胴部下半に焼き膨れが見られる。内面にはまばらにススが付着する。5は内面に、7は外面にまばらにススが付着する。また、5の底部には糸切り離し後の板状圧痕が見られる。9は外面のほぼ全体に黒斑がみられ、また内面は被熱の痕がある。

第13図は土師質土器坏・小皿以外のピット出土遺物である。1・2は龍泉窯系青磁碗である。1は鎚連弁文が施され、2は見込みに「金玉満堂」印が見られる。3は土師質土器の鉢か？4・5は須恵質土器の握鉢、7は瓦質土器の挿鉢である。6は備前焼の甕で、多量の自然釉がかかる。

## 2. 第2面 (第14図 図版9)

### 掘立柱建物跡 (第15図 図版10)

この掘立柱建物跡は調査区北側で確認された。主軸方向はN-81°-Wに取り、柱間は1間×3間と判断したが、北側調査区外へ広がる可能性もある。規模は柱穴間の心々距離で桁行約1.7~1.8m、梁行約6m、柱穴の深さは13~43cmを測る。また、P3、4、7、8で柱痕跡が確認できた。

遺物はP1、2、5から土師質土器坏が出土している。

### 6号溝状遺構 (第15図 図版10)

この溝は調査区の北西側で確認され、北方向へ伸びるとみられる。確認された規模は南北約9.2mを測り、南端で1.2mほど東へ折れている。断面形は逆台形状を呈し、床面はほぼ平坦である。検出面から床面までの深さは約3~20cmを測る。なお、この溝は建物跡と軸方向が揃うことから建物を囲う溝であった可能性がある。

## 土坑 (第15図 図版11)

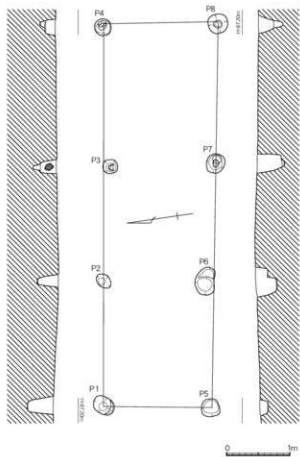
### 7号土坑

この土坑は調査区北東側で確認され、北側は調査区外へ広がる。平面形は円形もしくは楕円形を呈するとみられる。この土坑の床面については、検出面より約30cm下位で水が浸み出し、掘り下げが困難となった。こうしたことから、レベルの確認を行い、公民館の建物基礎がこの位置まで達しなかったため、掘り下げを中止した。なお、壁はほぼ垂直に立ち上がることから、素掘りの井戸である可能性も考えられるが、明確に判断できるものは確認できていない。規模は東西軸約0.9m、南北軸約0.8m+αである。

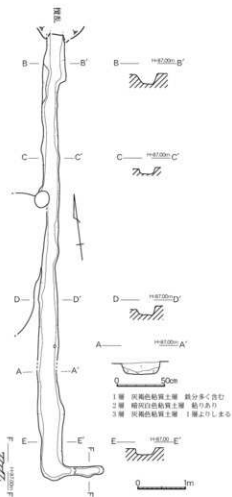
遺物は土師質土器坏が出土した。

### 8号土坑

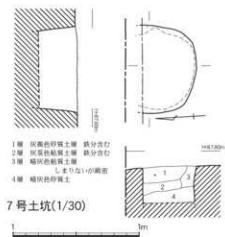
この土坑は調査区西側で確認され、西側は調査区外へ広がる。6号溝状遺構や数基のピットに切られる。平面形は不定形で、底面は北側に向かって緩やかに傾斜する。壁は緩やかな傾斜で立ち上がる。規模は長軸約2.9m、短軸約1.4m+α、検出面からの深さは約10cmである。



掘立柱建物跡(1/60)

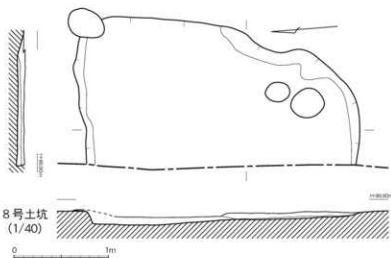


6号溝(1/80・土層1/40)



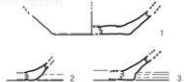
7号土坑(1/30)

- 1層 灰褐色砂質土層 鉄分含む
- 2層 灰白色粘質土層 鉄分含む
- 3層 暗灰色粘質土層
- 4層 暗灰色砂質土



8号土坑(1/40)

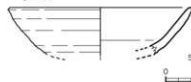
掘立柱建物跡



6号溝



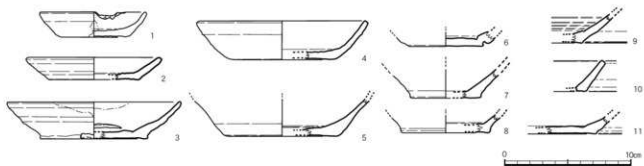
7号土坑



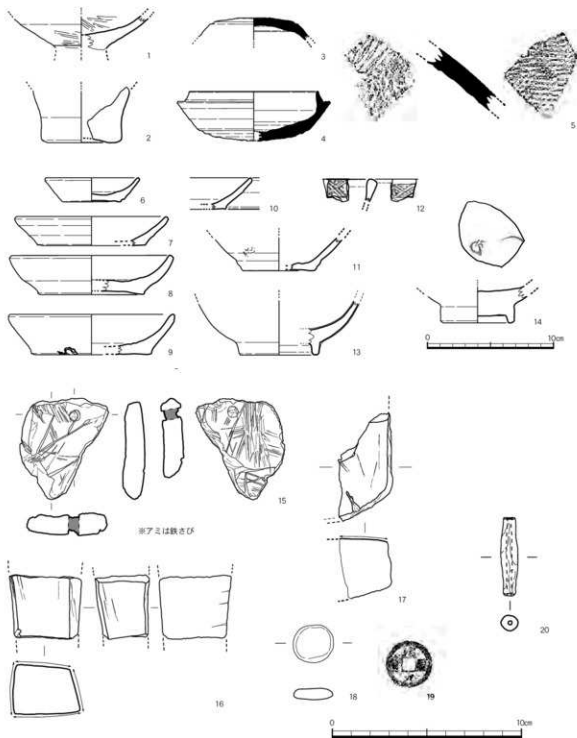
8号土坑



第15図 第2面遺構実測図及び出土遺物実測図(1/30・1/40・1/60・1/80・1/3)



第16図 第2面ピット出土遺物実測図 (1/3)



第17図 その他の出土遺物実測図 (1~14 : 1/3、15~20 : 1/2)

遺物は須恵器類と思われる破片などが出土した。

### 3. ビット及びその他の遺物 (第16・17図 図版17・18)

#### ビット

第16図はビットから出土した遺物で、いずれも土師質土器坏である。1は内外面ともに半分ほどススが付着し、口縁に打ち欠きが見られる。2は外面にまばらにススが付着する。6は内外面とも、全体的に黒斑が見られる。10は内面に、11は内外面ともにまばらにススが付着する。

#### その他

第17図は調査区一括や整地層中、試掘時に出土した遺物、ならびに中世以前の時期の遺物について図示した。出土位置等は第3表を参照されたい。

1は土師器高坏の坏部で、内外面とも剥離が顕著である。2は弥生土器甕、3～5は須恵器でそれぞれ、坏蓋・坏身・甕である。これら1～5の遺物はビットから出土したものであるものの、本来は整地層として造成された土に混入したと考えられる。

6は土師質土器小皿で、胎土に3mm程度の石英を含む。7～11は土師質土器坏である。11は底部及び胴部に丸くススが付着する。12は染付碗か。貫入がわずかに入る。14は龍泉窯の青磁碗で、大きめの貫入が入る。

15は滑石製温石である。全面にわたって、摺り目が見られ、また、穿孔が1ヶ所見られるが、この部分に鉄が詰まっている。寸法は最大長8.0cm、最大幅7.1cm、最大厚1.9cm、重さ132.0gである。石鍋の転用品か。16は安山岩製の砥石で全面に使用痕が見られる。寸法は最大長5.1cm、最大幅4.8cm、最大厚4.0cm、重さ204.6gである。17は安山岩製の砥石で使用面は一面のみである。寸法は最大長5.1cm、最大幅4.8cm、最大厚4.0cm、重さ179.1gである。18は基石と思われる。寸法は径2.0～2.1cm、最大厚0.6cm、重さ4.495gである。19は北宋銭の紹聖元宝(1094年初鑄)である。寸法は径2.4cm、厚さ0.1cm、重さ2.765g、孔は一辺0.7～0.8cmである。20は土錘で、被熱による黒変が見られる。色調は茶褐色から黄褐色を呈し、斜長石・角閃石を含む。長さ4.2cm、最大幅0.9cm、孔径0.8cm。

## IV 慈眼山遺跡出土木材の樹種同定

佐々木由香(榎バレーオ・ラボ)

### 1. はじめに

慈眼山遺跡は大分県日田市上城内町に位置する、中世の集落跡である。調査区では中世(15～16世紀)の整地層が2枚(上層・下層)確認され、上層から検出された柱穴には柱材が残っていた。ここでは柱材の樹種同定結果を報告する。

### 2. 試料と方法

試料は、整地層の上層にあたるB2グリッドP11から出土した柱材1点である。時期は上層から出土した土器型式から判断して、16世紀前半と考えられている。

同定試料のプレパラートは、木材の木取りなどを観察後、目視できる組織を観察しながら直接切片を採取して作製した。切片は片刃剃刀を用いて、横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柁目)の3断面を採取し、ガムクロラールで封入した。同定はこれらのプレパラートを光学顕微鏡にて40～400倍で検鏡し、現生標本と対照して行った。プレパラートは、榎バレーオ・ラボに保管されている。



### 3. 結果

同定した結果、P11の柱材の樹種は、針葉樹のマツ属複維管束亜属であった。柱材は直径約15cmで、木取りは芯持丸木であった。樹皮は残存していない。柱材の下端には、伐採時の鉄斧による伐採痕が残り、中央部分は折れていた。伐採痕には、鉄斧の歯こぼれ痕が明瞭に観察できた。柱材の上端は腐食のため尖わっていた。

以下に材組織の特徴や生態、材質の特徴を記載し、同定の根拠とする。

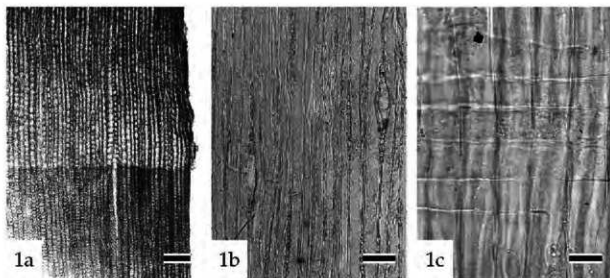
#### (1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 (写真5 1a-1c)

仮道管・垂直および水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞と、放射柔細胞および放射仮道管によって構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材は明瞭である。放射組織は1~10細胞高、上下両端の放射仮道管と、内側の放射柔細胞によって構成され、放射柔細胞の分野壁孔は窓状。放射仮道管に鋸歯は観察できなく、アカマツかクロマツかは不明であった。

マツ属複維管束亜属は短枝に針葉が2本ずつ付くマツ(ニヨウマツ類)で、日本列島にはアカマツとクロマツがある。アカマツとクロマツはいずれも高木になる常緑針葉樹で、アカマツは尾根沿いや崖など、土壌が薄く乾いていて陽の当たる場所に生育し、各地の山野に普通にみられる。クロマツは海岸沿いに多く、また古くから植栽されている。材はやや重硬で割裂困難、耐湿性がある。

### 4. 考察

柱材の樹種はマツ属複維管束亜属(ニヨウマツ類)であった。ニヨウマツ類の材質は重硬で耐湿性があり、本遺跡のような湿地的な環境で構築される建造物の柱として、材質的に適していたと考えられる。一般的に中世段階になると、周辺植生にニヨウマツ類が増加する遺跡が多いため、当時の程度周辺にあったのか、今後花粉分析などを実施することにより、明らかになると考えられる。



1a-1c. マツ属複維管束亜属 (P11)

a: 横断面 (スケール=200 $\mu$ m) b: 接線断面 (スケール=100 $\mu$ m) c: 放射断面 (スケール=50 $\mu$ m)

写真5 慈眼山遺跡出土柱材の光学顕微鏡写真

## V 総括

前章までに報告してきたように、本調査では2面の整地層とそれに掘り込まれた掘立柱建物跡や溝状遺構、土坑、ピットなどが多数確認された。最後にまとめとして、これらの遺構について時期（渡邊2010を参考）や性格について、考えてみたい。

まず、溝状遺構については、第1面で確認された5条のうち、1号はT字状に東西方向と南北方向を軸とし、2～5号は東西方向を軸とする。2～5号溝状遺構については、東側から西側へ傾斜していることから、水路としての機能をもっていたと考えられる。これに対し、1号溝状遺構についてはピットや土坑を囲うように掘られており、区画溝としての機能を持っていた可能性もある。これらの遺構から出土した遺物を見ると、内面の溝状ナデがない点や口縁部の開き等からV期（15世紀末～16世紀初頭）に当たるものが多いが、ほかに様々なタイプの土器が出土していることから、VI期（16世紀前半）と考えたほうがいだろう。なお、4号溝状遺構が出土した遺物は前章で指摘したとおり、土師質土器を中心に少なくとも約40個体分が出土したことから、短期間での廃棄行為があったものと考えられる。

次に遺物が出土した土坑についてみる。2号土坑については、体部をやや内湾させながら立ち上がり、口縁端部を薄く仕上げられる（第9図1）から、IV期（15世紀中頃～後半）とみていだろう。次に6号土坑については、14世紀代のもつとみられる青磁皿（第9図2）があるが、第9図3～6の環口縁の立ち上がりなどからVI期としていだろう。その他、第1面のピット（B2-P21）から出土した青磁碗は青磁蓮弁文碗C群であり、15世紀末～16世紀初頭に位置付けられる。

次に第2面の遺構及び出土遺物は、それほど多くないが、ある程度時期を特定できる遺物は出土している。

まず、B3-P51から出土した土師質土器（第16図9）は、内面に溝状ナデを施しており、IV期（15世紀中頃～後半）以前に位置づけられる。また、B2-P59出土の環（同図4）は体部が丸味を帯びながら立ち上がるタイプも同様にIV期のものと考えられる。

このようにみても、今回確認された遺構は15世紀中頃から16世紀前半にかけてのもつとみられ、それほど大きな時期差はなく、短期間のうちに2度にわたる土地造成が行われたと判断できる。

ピットについては、埋土中に柱材と思われる木片があり、柱穴と判断できたものもあった。このうち、比較的残りのよかった柱材（B2-P11）について、樹種同定を行った結果、湿気に強いマツであったことが判明した（IV参照）が、当時の植生環境や土地利用の実態を考える上で重要な成果といえよう。

また、祭祀の痕跡とみられる遺構はピットと土坑が確認されたが、6号土坑のように複数の土器や川原石を埋めたものと1点の土器しか埋めていないA2-P41のようなピットがある。そこには祭祀の目的なり、方法なり、何らかの違いがあったと考えられるが、この点については、今後の課題とした。

最後に今回の調査で確認された遺構は過去の調査（主に4～7次）と比べて、比較的その密度が低かった。これは、本調査区付近において、旧地形が西側へ向かって傾斜し、遺構が途切れていることが予備調査段階で確認されていることから、集落の境界部分にあたると思われる。坂本氏によれば、今回の調査地付近（宇熊崎）は条里道路の西側にあたり（坂本2011）、この時期の城下町的な景観の広がりや現在の南北約400m、東西約300mの範囲に想定しており、今回の調査地がその南端にあたることから遺構密度が低かったことの裏付けになると考えられる。

### 主な参考文献

- 上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- 田中裕介 『慈眼山遺跡（A地区）』大分県文化財調査報告書第85輯 大分県教育委員会 1991
- 中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』真福社 1995
- 行時志郎 『上ノ馬遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集 日田市教育委員会 2000
- 渡邊隆行 『慈眼山遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第75集 日田市教育委員会 2007
- 渡邊隆行 『慈眼山遺跡7次』日田市埋蔵文化財調査報告書第95集 日田市教育委員会 2010
- 行時桂子 『慈眼山遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第84集 日田市教育委員会 2008
- 坂本弘弘 『慈眼山遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第55集 大分県教育委員会 2011

第1表 出土土器観察表(1)

通観 品目 番号	出土 位置等	形状 種類	器種	通観			口径		高さ		重量		断面		内面		外面		底面		胎土		焼成		色調		備考	
				口径	高さ	重量	口径	高さ	重量	口径	高さ	重量	口径	高さ	重量	口径	高さ	重量	口径	高さ	重量	口径	高さ	重量	口径	高さ		重量
第7001	1溝	12	土師	埴	(1.6)																							
第7002	1溝	12	土師	埴	2.9																							
第7003	1溝	1	12	土師	小器 (57.4x2)	7.9	2.5	5.2																				
第7004	1溝	12	土師	埴	(1.6)	(4.9)																						
第7005	2溝	12	土師	埴	(1.2)																							
第7006	2溝	12	土師	埴	(2.3)																							
第7007	2溝	12	土師	埴	3.1																							
第7008	2溝	12	土師	小器	(7.2)	1.6	(5.2)																					
第7009	2溝	12	土師	埴	(10.6)	2.6	(6.6)																					
第7010	2溝	12	土師	埴	2.6																							
第7011	2溝	12	土師	埴	(1.6)																							
第7012	2溝	12	土師	埴	(1.2)																							
第7013	2溝	12	土師	小器	(7.6)	1.6	(5.8)																					
第7014	2溝	12	土師	埴	(1.4)	9.2																						
第7015	2溝	12	土師	埴	(1.7)	(10.6)																						
第7016	2溝	12	土師	埴	(14.6)	3.0	(10.6)																					
第7017	2溝	12	土師	埴	(14.0)	3.0	(9.8)																					
第7018	2溝	12	土師	埴	12.9	3.5	9.2																					
第7019	2溝	12	土師	摺手																								
第7020	2溝	12	土師	摺手																								
第7021	4溝	12	土師	埴	(10.6)	2.6	7.0																					
第7022	4溝	1	12	土師	埴	10.3	2.9	7.2																				
第7023	4溝	12	土師	埴	(11.8)	3.0	(5.6)																					
第7024	4溝	12	土師	埴	(11.2)	3.1	(6.6)																					
第7025	4溝	13	土師	埴	(12.0)	3.2	(8.8)																					
第7026	4溝	23	土師	小器	(7.4)	1.5	(5.8)																					
第7027	4溝	13	土師	埴	(1.6)	(7.6)																						
第7028	4溝	13	土師	埴	(1.5)	(8.0)																						
第7029	4溝	13	土師	埴	(2.4)	(9.0)																						
第7030	4溝	13	土師	埴	2.2																							
第7031	4溝	13	土師	埴	2.5																							
第7032	4溝	13	土師	埴	(1.6)	7.4																						
第7033	4溝	13	土師	埴	(1.2)	(6.6)																						
第7034	4溝	13	土師	埴	(2.1)	(5.8)																						
第7035	4溝	13	土師	埴	(1.8)																							
第7036	4溝	13	土師	埴	(1.2)	(6.4)																						
第7037	4溝	13	青磁	甕	(11.0)	(2.9)																						
第7038	4溝	13	瓦葺	大鉢		(3.9)																						
第7039	4溝	13	瓦葺	鉢鉢		(6.2)																						
第7041	5溝	13	土師	埴	(2.7)	(3.0)																						
第7042	5溝	13	青磁	片巻		(2.1)																						
第7043	5溝	13	青磁	甕	(11.4)	(2.3)																						
第7044	2土	13	土師	埴	(11.4)	3.3	(7.2)																					
第7045	6土	5	14	青磁	甕	(16.0)	(3.1)																					
第7046	6土	2	14	土師	埴	13.0	3.3	9.2																				
第7047	6土	4	14	土師	埴	(11.8)	2.9	(9.0)																				

第2表 出土土器観察表(2)

調査 場所	遺跡 番号	出土 位置	形状	種類	口径・高さ・底径			容量		胎土		胎色		備考					
					口径	高さ	底径	外周	内周	表面	断面	胎土	胎色		内面	外面			
第1005	B-1	L3	13	土師	弁	13.1	3.2	9.1	回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼 板状底	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面1/3程度焼、底部に赤褐色
第1006	B-1	E	13	土師	弁				回転ナデ	回転ナデ		○	○	○	○	○	灰白色	褐色	底面1/3程度焼、底部に赤褐色
第11001	A2	P14	14	土師	小瓶	6.8	1.2	4.4	回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/2焼
第11002	A2	P14	14	土師	小瓶	6.2	1.9	4.2	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/2焼
第11003	B2	P28	14	土師	小瓶	6.7	1.7	5.1	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	口縁部内面とも全体約1/2程度 灰スス付
第11004	A2	P16	14	土師	弁	6.0	2.4	5.0	回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/4程度
第11005	A2	P14	14	土師	弁	11.5	3.0	6.3	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	スス付
第11006	A2	P14	14	土師	弁	11.6	2.4	7.6	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	内面焼痕有り
第11007	A2	P14	14	土師	弁	11.8	3.0	7.6	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	赤切り焼 板状底	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	
第11008	A2	P18	14	土師	弁	12.6	3.2	7.2	回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	唇～灰白色
第11009	A2	P14	14	土師	弁	11.6	3.3	5.8	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/2焼
第11010	B2	P12	14	土師	弁	11.2	3.3	5.9	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	胎土による不明、内面にスス 付着を認める
第11011	A2	P16	14	土師	弁	11.4	2.8	6.0	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	赤切り後ナデ	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	口縁部は赤褐色
第11012	B2	P37	14	土師	弁	13.4	3.3	9.4	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	赤切り 板状底	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	(5)法面に焼けた痕跡有り
第11013	A2	P18	14	土師	弁	12.0	3.0	6.0	回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/2程度焼
第11014	A2	P18	15	土師	弁	11.4	3.2	6.0	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	打ち欠き有り、スス多付着
第11015	B2	P19	14	土師	弁	11.4	3.1	6.2	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	口縁部は口縁に赤褐色打ち欠き 有り
第11016	B2	P17	14	土師	弁	12.0	2.9	6.4	回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/4程度、底面部分にスス付
第11017	B2	P18	15	土師	弁	12.8	3.10	6.7	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	口縁部
第11018	A2	P14	14	土師	弁	10.5	2.4	7.0	回転ナデ	回転ナデ、ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	ススばらに付着
第11019	B2	P41	15	土師	弁	11.9	8.2		回転ナデ	回転ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	穿孔1ヶ所、打ち欠き多かつ一 側
第11020	A2	P11	14	土師	弁	12.1	6.0		回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底～底面片
第11021	A2	P16	15	土師	弁	6.2	1.7	7.8	回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し、赤切り 焼し後ナデ	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面1/2焼
第11022	A2	P20	15	土師	弁	6.0	6.0		回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	口内ばらにスス付、底面片、 全体約1/3程度
第11023	A2	P18	15	土師	弁	6.4	6.0		回転ナデ	回転ナデ後ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面1/2焼
第11024	B1	P1	15	土師	弁	6.8	6.4		回転ナデ	ナデ(厚縁の高調整 不明)	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面片
第11025	B2	P18	15	土師	弁	6.1	6.0		回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面のみ1/3焼、底縁部焼痕 による焼痕
第11026	B2	P12	15	土師	弁	6.0	7.4		回転ナデ	回転ナデ後ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面片
第11027	B3	P12	15	土師	弁?	6.7	6.4		回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し後ナデ	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面片、内面とも黒変色
第11028	B2	P15	15	土師	弁	6.1	6.8		回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面片、胎底部穿孔あり?
第11029	B2	P23	15	土師	弁	6.2	7.2		回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し、後 板状底	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	内～外まばらにスス付着
第11030	B2	P31	15	土師	弁	6.1	7.4		回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	口内スス付着
第11031	A2	P11	15	土師	弁	23+α			回転ナデ	回転ナデ、ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	スス付着
第11032	A1	P2	15	土師	弁	3.0			回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/3程度焼、内～外まばらにス ス付着
第11033	A2	P2	15	土師	小瓶	1.4			回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/3焼、内～外まばらにスス付着
第11034	B3	F18	15	土師	小瓶	1.6			回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し後ナデ	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/5焼、全体約1/3程度焼
第11035	A2	P18	15	土師	弁	23+α			回転ナデ	回転ナデ		○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	
第11036	B1	F1	15	土師	弁	6.8			回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面片、内面は全体に焼痕有 り
第11037	A2	P10	16	土師	弁	13+α			回転ナデ	回転ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	調整不明
第11038	A2	P16	16	土師	弁	20+α			ナデ後スス付	回転ナデ、ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	口縁部
第11039	B3	F16	16	土師	弁	6.0			回転ナデ	ナデ(厚縁の高調整の 高調整不明)	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	底面片、内面は全体にスス付着
第11040	A3	P1	16	土師	弁	22+α			回転ナデ	回転ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	外面黒変
第11041	A1	F1	16	土師	弁	14+α			ナデ	ナデ	赤切り	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	
第12001	A2	F16	16	土師	小瓶	6.2	1.8	4.4	回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し後ナデ	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/2焼
第12002	A2	F16	16	土師	弁	10.0	2.3	7.0	回転ナデ後ナデ	回転ナデ後ナデ	赤切り焼し	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	4周部自身と縁合、全体約1/3程 度焼、内～外付着内面焼痕有り
第12003	A2	F16	16	土師	弁	11.6	3.2	6.0	回転ナデ	回転ナデ	赤切り焼し後 板状底	○	○	○	○	○	赤褐色	赤褐色	1/3焼、底縁部焼痕と底面下半 部焼き多かつ(5)内～外まばらにス ス付着

第3表 出土土器観察表(3)

通観 種号 番号	出土 位置等	形状	種類	口径			高さ		外面	内面	底面	胎土				焼成	色澤		備考
				口径	高さ	底径	胎土	右				左	底	内面	外面				
第12084	A2 F6	16	土師 埴	(10.2)	2.5	(6.0)	同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	1/2程度焼
第12085	A2 F6	16	土師 埴	(11.0)	3.1	(7.2)	同転ナデ	同転ナデ後ナデ	赤切り施し後 肌色直焼	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄褐色	黄褐色	1/2程度、(内)全体まばらにスス 付着
第12086	A2 F6	16	土師 埴	15+α	(7.0)		同転ナデナデ?	同転ナデ	切り施し後ナデ (赤直焼)	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	
第12087	A2 F6	16	土師 埴	(1.8)	(6.2)		同転ナデ	同転ナデ	切り施し後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	褐色	褐色	底面片、(内)まばらにスス付着
第12088	A2 F6	16	土師 埴	3.2			同転ナデ	同転ナデ	切り施し後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	1/2程度焼、(内)底面は全体 の焼色より全焼付た感じ
第12089	A2 F6	16	土師 埴	3.5			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄白色	淡黄白色	1/5焼
第120910	A2 F6	16	土師 埴	2.4			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄褐色	黄褐色	1/5程度、(内)一スス付着
第120911	A2 F6	16	土師 埴	2.4+α			同転ナデ	同転ナデ後ナデ	赤切り施し後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	暗黄褐色、(肌 裏面)黄褐色	黄褐色	黄変
第120912	A2 F6	16	土師 埴	2.4			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	1/5程度、焼後全体にスス付着
第120913	A2 F6	16	土師 埴	(1.0)			同転ナデ	同転ナデ後ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡褐色	淡褐色	底面片、(内)底面スス付着
第120914	A2 F6	16	土師 埴	(2.1)			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄白色	淡黄白色	肌一底面片ナデ
第120915	B2 P21	16	青磁 甗	(14.4)	(2.4)		胎土	胎土	胎土							赤	青緑褐色	青緑褐色	陶質堅軟
第120916	B2 P21	16	青磁 甗	(1.8)	(5.8)		胎土	胎土	胎土							赤	青褐色の透明物	青褐色の透明物	胎土の透明物、見出し金土質鑑定
第120917	B2 P12	16	土師 鉢?	(3.8)			同転ナデ、オサエ、 ナメハツ目後ナデ	コソハク目								赤	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部片
第120918	B2 P12	16	土師 鉢?	(2.3)			オサエナデ	コソハク目後ナデ								赤	淡黄白色	淡黄白色	胴部片
第120919	A2 F8	16	土師 鉢	(1.6)	(6.0)		オサエ、ナデ	コソハク目後ナデ								赤	灰黒～灰褐色	灰褐色	底面片と胴部片の合成
第120920	A2 F6	17	陶器 甗	(11+α)			同転ナデ	ナメハツ目後同転ナデ								赤	暗黄褐色	暗黄褐色	自然物多量から、窯出
第120921	A1 F2	17	瓦葺 鉢	(10.0)	(3.0)		ナデ、ナメハツ、 コソハク	ナメハツ、ナデ	ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色、 淡褐色	淡黄褐色	黄変あり
第120922	F1	17	土師 埴	(1.8)	(6.2)		同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄褐色	黄褐色	底面片
第120923	F2	17	土師 埴	(1.4)			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	底面片
第120924	F5	17	土師 埴	(1.9)			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	底面片
第120925	6溝	1	17	土師 甗	(5.1)		ハク目後ナデ	オサエ、ナデ								赤	淡黄褐色	淡黄褐色	胴一底面片、(内)ナデ、スス 付着
第120926	土	17	土師 埴	(4.2)	(9.8)		同転ナデ	同転ナデ								赤	淡黄褐色	淡黄褐色	口縁部1/3程度
第120927	6土	17	陶器 甗	(2.2)	(1.9)		同転ナデ	ナデ								赤	灰青色	灰青色	
第120928	B2 P83	17	土師 埴	(8.5)	2.0	5.9	同転ナデ	同転ナデ、ナデ	赤切り施し後肌直焼	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄褐色	黄褐色	内外ともに自然物スス付着、 打つたまあり
第120929	A2 P55	17	土師 埴	(10.4)	1.8	(7.2)	同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	灰白色	灰白色	1/4程度、(内)まばらにスス付着 スス付着
第120930	B2 P51	17	土師 埴	(13.0)	2.9	(8.3)	同転ナデ	同転ナデ、ナデ	赤切り、肌直焼後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄褐色	黄褐色	
第120931	B2 P51	17	土師 埴	(12.2)	3.1	(7.8)	同転ナデ	同転ナデ	切り施し後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	
第120932	B2 P55	17	土師 埴	(8.3)	(8.8)		同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡褐色	淡褐色	胴ナデ～底面片
第120933	A2 P52	17	土師 埴	(1.1)	(5.9)		同転ナデ (一スス土質ナデ)	同転ナデ後ナデ	赤切り施し後 肌直焼	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄褐色	黄褐色	底面のみ、内外とも全部的に 黄変
第120934	B1 P53	17	土師 埴	(2.3)	(5.4)		同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	
第120935	A2 P59	17	土師 埴	(1.4)	(3.5)		同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄白色	淡黄白色	底面片
第120936	B3 P51	17	土師 埴	(2.3)			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄白色	淡黄白色	肌一底面片
第120910	B2 P56	17	土師 埴	2.4			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄白色	淡黄白色	口縁～底面片、(内)まばらにスス 付着
第120911	B2 P57	17	土師 埴	(1.4)			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	底面片、(内)まばらにスス 付着
第120912	F2	17	土師 高埴	(2.7)			ミガキ	ミガキ	赤褐色	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	内外とも陶質堅軟、ナデ?
第120913	下層	18	赤土 甗	(4.1)	(6.2)		ナデ	網罟	ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄褐色	黄褐色	底面片
第120914	A2 F6	18	赤土 甗	(1.8)			同転ヘラケズリ、 同転ナデ	同転ナデ								赤	灰褐色	灰褐色	1/4程度
第120915	下層	18	赤土 甗	(10.2)	3.9		同転ナデ、 同転ヘラケズリ	同転ナデ								赤	灰青色	灰白色、 灰青色	1/4程度、自然物多量に付着
第120916	下層	18	赤土 甗?	(5.0)			平行ナメハツ目、 平行ナメハツ目 後ナメハツ目	平行ナメハツ目、 平行ナメハツ目								赤	灰色	暗灰褐色	胴部片
第120917	土層	18	土師 小埴	(7.3)	1.9	4.4	同転ナデ	同転ナデ、ナデ	赤切り後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡黄褐色	淡黄褐色	右側3スリ程度
第120918	1トド	18	土師 埴	(11.8)	2.3	(8.4)	同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄褐色	黄褐色	口縁～底面片
第120919	土層	18	土師 埴	(12.4)	3.1	(8.2)	同転ナデ	同転ナデ	赤切り後ナデ	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	褐色、黄褐色	褐色～ 黄褐色	
第120920	眞2 トド	18	土師 埴	(13.0)	3.2	(8.4)	同転ナデ	同転ナデ後ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄白色	黄白色	胴一底面片
第120921	A1 土層	18	土師 埴	2.5			同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	淡褐色	淡褐色	1/5程度、底面片のみ黄変を明瞭
第120922	一鉄	18	土師 埴	(2.4)	(5.4)		同転ナデ	同転ナデ	赤切り施し	〇	〇	〇	〇	〇	〇	赤	黄褐色	黄褐色	底面～胴部ナデ、(内)底面、 胴部に丸くスス付着
第120923	一鉄	19	青磁 甗	(4.2)	(6.2)		胎土	胎土	胎土							赤	透明物	透明物	黄変あり、(内)に入ら
第120924	一鉄	19	青磁 甗	(2.9)	(5.8)		胎土	胎土	胎土							赤	青褐色の透明物	青褐色の透明物	底面、土質
第120925	一鉄	19	青磁 甗	(2.9)	(5.8)		胎土	胎土	胎土							赤	青褐色の透明物	青褐色の透明物	高台部の少量、黄変入り、(内)に入ら



調査区全景（北西から）



調査区全景（西から）



調査区東壁土層堆積状況



第1面全景（北東から）



1号溝状遺構発掘状況(北西から)



1号溝状遺構遺物出土状況



2・3号溝状遺構発掘状況(西から)



3号溝状遺構土層堆積状況





4号溝状遺構発掘状況（東から）



5号溝状遺構発掘状況（西から）



4号溝状遺構遺物出土状況



4号溝状遺構土層堆積状況

2号土坑発掘状況（西から）

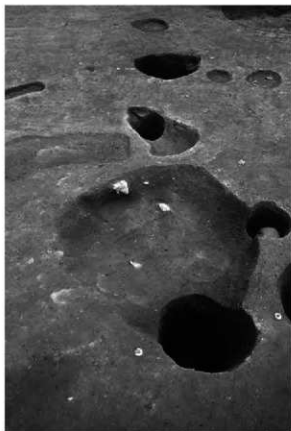


3号土坑発掘状況（北から）



5号土坑発掘状況（北西から）





4号土坑発掘状況（北東から）



6号土坑発掘状況①（北東から）



6号土坑発掘状況②（北東から）



6号土坑発掘状況③（北東から）



A 1 - P2 発掘状況



A 2 - P6 発掘状況



A 2 - P14 発掘状況



A 2 - P23 発掘状況



A 2 - P26 発掘状況



B 2 - P11 発掘状況



B 2 - P11 (柱木) 発掘状況



B 2 - P12発掘状況



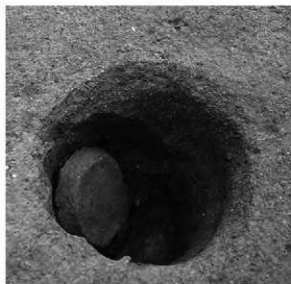
B 2 - P18発掘状況



B 2 - P19発掘状況



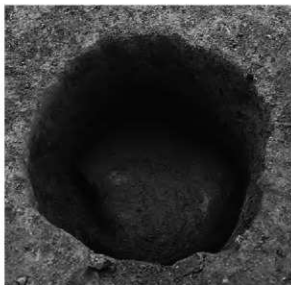
B 2 - P28発掘状況



B 2 - P41発掘状況



B3-P1発掘状況



B3-P32発掘状況



第2面全景 (北東から)



掘立柱建物跡発掘状況（西から）



6号溝状遺構発掘状況（北西から）



6号溝状遺構遺物出土状況



6号溝状遺構土層堆積状況



7号土坑発掘状況（西から）



8号土坑発掘状況（北東から）



7号土坑土層堆積状況

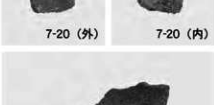
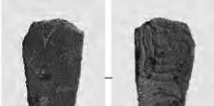
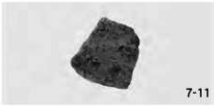


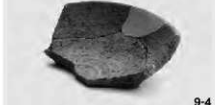
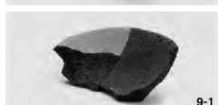
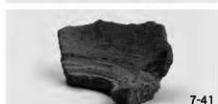
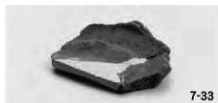
B2-P61発掘状況

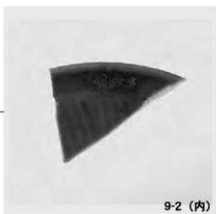
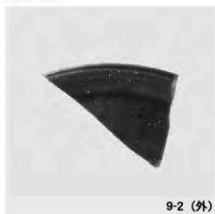


B2-P73発掘状況











11-14 (内)



11-17



11-19 (内)



11-14



11-18



11-19



11-21



11-22



11-19 (底)



11-23



11-24



11-25



11-29



11-27



11-28



11-26



11-30



11-31



11-33



11-34



11-35

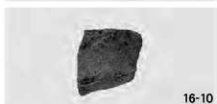
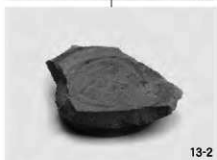


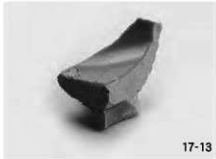
11-32



11-36







## 報 告 書 抄 録

ふりがな	じげんざんいせき8じ
書名	慈眼山遺跡8次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第103集
編著者名	若杉竜太 佐々木由香
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1 0973(24)7171
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2012年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
慈眼山遺跡 8次	大分県日田市 上城内町 1091-1	44204-6	204134	33°19'40"	130°56'31"	20100721 ～ 20100910	380㎡ (190㎡ ×2面)	公民館 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
慈眼山遺跡 8次	集落	中世	掘立柱建物跡1棟 溝状遺構6条 土坑7基・ピット多数	土師質土器 青磁 土錘・紹聖元寶 温石・砥石	祭祀に利用され たと考えられる ピットや土坑を 検出

<b>要 約</b>	<p>遺跡は盆地東部の佐寺原台地東裾から延びる沖積地上にある。調査では、15世紀後半から16世紀前半を中心とした、掘立柱建物跡や溝状遺構、土坑、ピット・柱穴などが確認された。土坑やピットの中には、口縁を打ち欠いたり、穿孔を施した土器や川原石などが故意に埋められたと判断できる状況で出土し、こうした遺構は祭祀行為に伴うものと考えられる。これらの遺構は、厚さ30cmほどの2面の整地層に少なくとも二時期にわたって、掘り込まれていることが確認できた。これは、遺跡一帯が湿気の多い土地であったことから、造成の必要性があったと考えられるが、この時期、大藏姓日田氏から大友姓日田氏へと支配層が移る中で計画的に造成されたものと考えられる。</p> <p>また、柱穴より出土した柱材の樹種は湿気に強いマツであったことが判明したが、本遺跡においては、構造物の柱として利用するのに有効な木材であったということができよう。</p>
------------	--



## 慈眼山遺跡 8 次

日田市埋蔵文化財調査報告書第103集

2012年3月30日

- 編 集 日田市教育庁文化財保護課  
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1
- 発 行 日田市教育委員会  
〒877-8601 大分県日田市田島2-6-1
- 印 刷 尾花印刷株式会社  
〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8



日田市